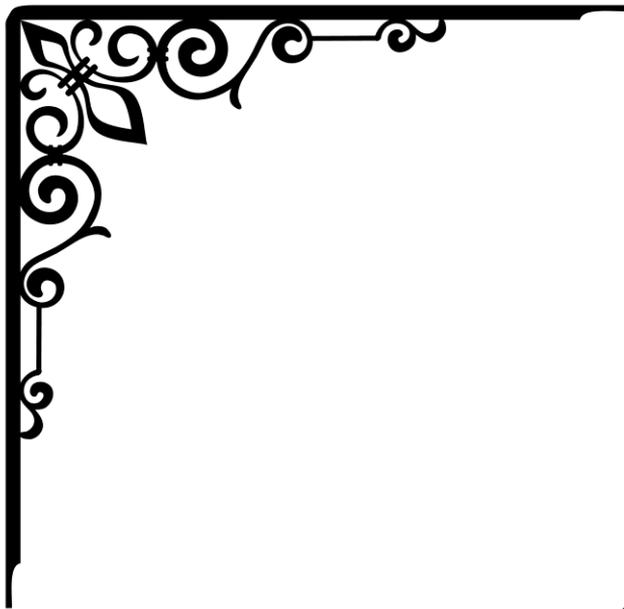


Paraphile

~本当の自分~

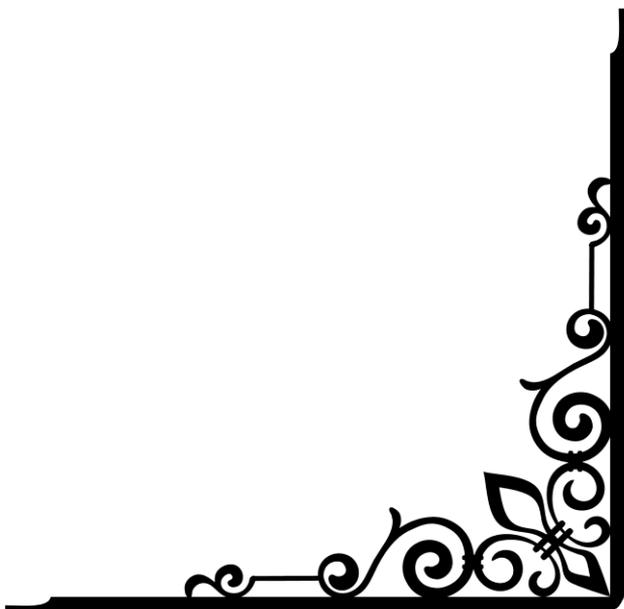


R-18
Adult Only



Paraphile

~本当の自分~



「清花……」

「あ……、ん……っ」

正行さんの舌が、口の中へと入ってくる。

だから目を閉じて、それを受け入れていると――

「……………」

彼の手が、私の胸に伸びてきた……………！

「んっ！ んうう……………っ！」

（こ、これぐらいはガマンしなきゃダメよね……………）

私は自分の身体が強張っていくのを感じつつ、正行さんの手と舌を受け入れ続けた。

すると、少しずつ彼の息づかいが早くなり――

「……………っ」

とうとう指が、ショーツの中まで伸びてきた！

「いっ、いや……………っ！」

反射的に、ビクリと跳ね起きる。

そんな私を――

「清花……………？」

正行さんが、ビックリしたような顔で見ている。

（当たり前よね……………。急に跳ね起きたんだから。でも……………どうしてもあれ以上はガマン出来なかったの……………）

だってあれ以上、彼の指が奥まで進んでいたら……………彼は私の秘密に気づいてしまうから。

（そしたらきつと、嫌われちゃう……………！）

だから絶対、大好きな正行さんには知られたくない。

……………私の身体が変わったことを。

「い、ごめん……………！ その、焦るつもりはなかったんだけど……………」

「え……………っ？ あつ、い、いいの！ そんな、私のほうこそごめんなさい！ その……………ちよつと驚いちゃって……………ごめんなさい……………」

私のほうが悪いのに。

強く拒まれて、すぐく傷ついたと思うのに……………。

それなのに、正行さんは――

「ううん。僕が急ぎすぎでいたんだ。ごめんね」

優しく笑って、私の髪を労わるみたいにそつと撫でてくれた。

そんな彼の優しさに、目頭が熱くなると共にギュツと胸が痛くなる……………。

「……………っ」

「……………今日はこれで帰るよ。またメールするね」

正行さんは、私が落ち込んでいて一人になりたいと思つていることを察してくれたのか、そう言つてもう一度私の頭を撫でたあと、『おやすみ』と帰つていった。

「……………ごめんなさい」

正行さんが優しくければ優しいほど、申し訳なく思つてしまう。

（ホントは私だつて彼のこと、受け入れたいのに……………でも……………この身体を……………あの人に見られたくない……………）

服を脱ぎ、身体を鏡に映してみる。

そして、改めてそう思つた。

こんな醜い身体、やつぱりどうしても正行さんには見せたくないし、知られたくない。

(ああ……やっぱり大きい。変よね、こんなの……)

鏡には、割れ目の中からチラリと顔を覗かせるピンク色したクリトリスが映っている。

(勃起していない状態でこれだもの……。勃ったらもつと酷いことになるのよね……)

恥ずかしさとおぞましさで、鏡からスツと目を背ける。

(どうして私の、こんなに大きいのかしら？ そんなに触った覚えもないのに……)

オナニーという行為を知識として知った時は、それは何度か試しはした。

でも――

(そのあとすぐに彼氏が出来て……その人に大きすぎて変だつて、気持ち悪いってそう言われて……オナニーすると余計に大きくなっちゃいそうで、するのやめたのよね)

あの日以来、私は自分で触ったりも、誰かに触られたりもしていない。

なのに――

(なんだか、どんどん大きくなってきてる気がする……)

クリトリスはグングン大きく育つばかりで、今にも割れ目の中から飛び出してきちゃいそう。

(今でもチョッピリ見えてるぐらい、大きいのに……)

だからやっぱり私はこんな卑猥でグロテスクな物を、大好きな人に見せる訳にはいかない。

(あんな思いは、もうたくさん)

あの時と同じような思いを、もう二度とたくはない。

(でも、いつまでも拒み続けてはられないわよね……。どう

しよう……)

その答えは出ないまま、そして夜は更けていった。

scene02 【清花】

始業ベルが鳴って教室に入り――

「はーい、みんなおはよう！ き、席に着いて着いて〜」

自分が担任を受け持つ生徒たちに、そう声をかけて着席させる。

「……ん、はい。みんな席に着いたわね。じゃあ、出欠取っていくわね」

出席簿をめくりながら、生徒の名前を呼んでいく。

「相田くん」

「はい」

「秋山くん」

「はい」

「……伊部さん」

「はい」

彼女の名前をここ――教壇で呼ぶとき、私はいつも緊張する。

何故ならそれは、彼女――伊部愛奈ちゃんが正行さんの妹だから。

（正行さんと付き合っていることがみんなにバレるとか、愛奈ちゃんが彼の妹さんで、そのせいで私が彼女を贖戻してるとか……）

……そんな風にもし思われたらっと思うと、なんかつい緊張しちゃうのよね）

でもそれは考えすぎだと、そう自分を納得させて、出欠の続きを取っていく。

「江藤くん」

「はい」

「及川くん」

「はい」

生徒たちの名前を呼んでいく内、また少し緊張が走る。

（次は希くんね……）

彼、音林希くんは私の従弟にあたる男の子。

なので彼を特別扱いしていると、そうみんなに思われはしないかと、ついそんな心配をしてしまう。

（なるべく気をつけてるつもりではいるんだけど、でも……やっぱりつい、しちやってるんだろな。特別扱い。……だって可愛いんだもん、希くん）

私が親の転勤で引越す十年前まで、近所に住んでいた私たちは実の姉弟のように暮らしていて……再会した今も私は彼のことを本当の弟みたいに思っている。

だから私はきつと彼を知らず構いすぎていると思うから、こ

う……強く意識して自分を律しなければならいんだと、そう思う。

なので私は、キリリと心を引き締めて――

「音林くん」

少し強めに彼の名前を呼んだ。

「はい」

（……うん。今日も元気そうね。良かった）

ホッと安堵の息をつき、次の生徒の名前を呼ぶ。

そうこうする内――

「あ……」

またチャイムが鳴った。

「じゃあ、これで朝のホームルームは終了します。みんな、ち

やんと一時限目の授業の準備しておくのよ」

みんなが頷くのを見て、廊下に出た。

廊下に出たところで、正行さんと出くわす。

「あ……」

「……………」

同じ職場なんだから、こうして廊下で顔を合わせるのは当たり前のことかもしれないけど、でも昨日の今日だけに、ちょっと気まずい……。

「……………」

でも、正行さんのほうは昨夜のことを気にする素振りなんて少しも見せずに——

「おはようございます、矢野先生。次、僕の授業なんで、入りますね」

笑顔でそう言つて、教室の中へと入っていった。

「あ……」

(……いくら気まずかったからつて、挨拶も出来ないなんて……私つてば最低……)

酷い自己嫌悪に陥りながら、私はその場を後にした。

放課後。

五時を過ぎても日直の子が鍵を返しに来ないので、戸締りをして教室へと向かっていると——

「先生、さようなら」

「はい、さようなら」

「先生、また明日ね」

「ええ、気をつけて帰つてね」

これから帰宅する生徒たちに挨拶された。

それが男子生徒ばかりなのは、ここ——私立聖城学園が去年まで男子校だったせい。

(まだまだ女生徒の数は少ないのよね)

一クラスに一人いるかいないかという感じで、うちのクラスに女子は愛奈ちゃん一人だけだったりする。

なので寂しいんじゃないかなつて思うんだけど、彼女はきつとお兄さんがこの学校にいるから、ここに来たんだと思う。

(よく職員室に来て正行さんと話してるしね。でも、早く女の子の友達が出来るといいわよね。……まあ、クラスが違うからちょっと難しいとは思うけど……)

そんなことを考えながら、教室に入っていくと——

「あ……お姉ちゃん」

まだ居残つていた希くんが、笑顔で私のほうへと寄つてきた。

「希くん、まだ残つてたの？ もう五時過ぎよ？」

「えへへ……」

「えへへ、じゃないでしょ。それに、学校で私のことお姉ちゃんつて呼ばないの」

「いいじゃない、別に。今は二人きりなんだしさ。他に人がいる時は気をつけるよ」

「ホントに気をつけてよ？」

「うん」

「ならよろしい」

「……あ。ところで、柳原くん知らない？ 彼、今日の日直なんだけど」

「柳原くんなら、さつき帰ったよ」

「え？ そうなの？」

「真面目な子なのに、戸締りして帰らないなんて……何かあったのかしら」

「うーん。シヨックだったのかな……」

「シヨックって、何が？」

「僕に振られたこと」

「振られたって……えっ!？」

うちは去年まで男子校だったから、同性を好きになる子も……わりといたりする。

(でも……やっぱりちよつと、まだ慣れないわね。それに、可愛い従弟にソツチの気があるかと思うと……心配にもなるわ。あ、でも振ったってことは、希くんのほうは別に男の子に興味はないのよね)

「どうしたの？ なんか表情、目まぐるしく変わってるけど」

「……ん。ちよつとね。希くんにもその気があるのかなあって心配しちゃった。でも、ないのよね。振ったって言ってたし」

「え？ ないことないよ。柳原くんはタイプじゃないから断っちゃっただけで」

「……えっ!？ ちよつ、ちよつとそんなの……冗談でしょ？」

「そう思う？」

(……う。思わないかも……)

小さい頃から何度も芸能界のスカウトにあつた希くんには、本物の女の子だって負けちゃうかもしれない。

私だって彼には敵わないと思うほど、希くん綺麗な子なので、彼女がいると言われるより、彼氏がいると言われたほうがシツクリくるような気がする。

だから彼の言葉は冗談ではないのかもしれないと、そう不安に思っている——

「やだなあ。冗談だよ」

言って希くんは笑ってくれたから、ホツとして私も笑おうかと思っただけ——

「……今はね。でも、先のことは分からない。正直、女の子にあまり興味が持てないし」

すぐに続けてそう言われてしまったので、結局笑うことは出来なかった。

「ど、どうして？ 女の子っていいものよ？」

「そう言われてもね。どういいのかわからないし」

「うーん。優しかったり、ご飯を作ってくれたりとか」

「やだなあ。男の人でも優しい人はいっぱいいるよ。それにうち、父さんのほうが家事とか上手かったしね」

「あ……ど、ごめんなさい……」

希くんが『上手かった』と過去形でお父さんの話をしたこと気がつき、慌てて謝罪する。

彼のお父さんは一昨年、お母さんと一緒に事故でお亡くなりになったのだ。

そしてそのあと、一人になった希くんは寂しいのかうちの近くに引っ越してきた。

(どうしてだか、あまりおうちには入れてくれないんだけど……って、それはさて置き、早く話題を変えないと……気にしち

やうわよね)

「そ、そうね。男の子より女の子のほうがいいところって、他には……うん……」

お父さんのことから気を逸らそうとして話を元に戻してみたんだけど……残念ながらあまりいいネタが浮かばない。

そのため、うんうん唸っていると――

「あ、男と女の大きな違いって身体つきにあると思うんだよね」

希くんが唐突に、そんなことを言ってきた。

「あ……うん。そうね」

あまりに当たり前すぎて、何が言いたいんだかよく分からなかったけど……話題が変わってくれたことはありがたかったのだ、コクリと大きく頷きを返す。

すると希くんは同意を得られたことが嬉しいのか、『でしょ』と誇らしげに笑って、そして――

「じゃあさ、お姉ちゃんの身体、見せてくれない？ それで女の子に興味を持てるかどうか試したいんだ」

……そんな、とんでもないことを言ってきた！

「か、身体って……身体よね!？」

「うん」

「ダメよ、そんな……っ、ダメダメ!」

ブンブンと、激しく首を左右に振る。

だって、私の身体はとても人に見せられるようなものではない。
い。

(クリトリスが……異様に大きいんだから……)

「どうしてもダメ?」

「ダ、ダメに決まってるでしょ。そんなの……っ」

「僕が小さい時は一緒にお風呂、入ってくれたのに」

「そ、そういうのとはまた違うでしょ……!」

そう強く断っていると、希くんは――

「そっか。じゃあいいよ」

意外にもアツサリと引いてくれた。

……ちよっと拍子抜けしちゃったぐらい。

「え……っ。い、いいの……?」

「うん。だって別に、僕は女の子に興味なくても困らないし」

「……ッ!」

(いやにアツサリ引き下がったし、こんなこと言うなんて希くん、ホントにどちらかというと男の子のほうに興味があるのね。……どうしよう)

「……………」

(ここで私が身体を見せなかったら希くん、女の子に全く興味をなくしてしまうんじゃないの? それでもう完全に男の子が好きになっちゃうんだわ……っ)

そうフツフツと考え込んでいると――

「じゃあ僕、帰るね。バイバイ」

希くんはきびすを返し、廊下に出ようとした。

その背中に向かって私は『待って』と声をかけ、そして考えるよりも早く――

「む……胸……っ。胸だけなら……見せてもいいわ……」

気づくと……そんな言葉を口走っていた……。

「……ねえ、まだ？」

人目を避けるためにと床に座り込んだはいいけど、ずっと胸を見せようとしないうちに、希くんの困ったみたいなの、少し迷惑そうな声がかかる。

帰ろうとしているところを呼び止められて、ちよつと怒っているのかもしれない。

(でも……すごく恥ずかしいのよ……っ)

緊張で、さっきからずっと胸がドキドキ言っている。

でもそんなこと、女の子に殆ど興味のない希くんには全く関係ないみたいで——

「ごめんだけど、お姉ちゃん。僕もう帰っていい？」

退屈で仕方がないのか、そんなことを言い出した。

「まっ、待って……！　すぐに見せるから……っ」

ここで帰られてしまつては意味がないとそう思い、勢いに任せて慌てて服をめぐり上げていった……！

「こ……これで、いい……？」

……指が、カタカタと震える。

(従弟とは言え、男の子の前で私……何してるんだろ……。でも、これできつと女の子に興味湧いたわよね……？)

それならこうしたことの意味はあつたと、そんな風に考えることで自分を勇気づけようとしていると——

「うくん。悪いけど、そんな布つきれ見せられてもなんとも思わない」

希くんはそんな酷い言葉を返してきた。

「そ、そんなこと言わないで。ほら、下着つて可愛くない？　もつとよく見て？」

なんとか下着に興味を引きつけようとするんだけど——

「ハンカチでも可愛くて綺麗な物つていっばいあると思うし……。それと大差ないと思うんだよね、下着つて」

希くんは相変わらず申し訳なさそうな困った顔で、そんな身も蓋もないことを言ってきた。

(う……。希くんつてば、ホントに女の子に興味がないのね……)

ならもう仕方がないと、そう思い——

「こ……これでいいでしょ……？」

『えいっ！』とまた、勢いづけてブラをめぐり上げていった。

恥ずかしくて、カア……ツと顔が熱くなる。

でもその甲斐あつてか、希くんはジーツと私の胸を見ている。

(う……。っ。で、でも……あんまりそんな、ジーツと見られたら恥ずかしい……)

指先の震えが、足にまで広がっていく。

ここまでツライ思いをしているのに、希くんは残念そうに溜息をつき——

「胸つてさ、男にもついているじゃない？　だからあんまり女性特有の物つて感じがしないんだよね。でもサイズが違うかと思おうとしたんだけど、よく考えると男の人でも太った人の胸とか大きいしね」

そんな、私の努力を完全に無にする言葉を返してきた……。

「そんな……。これ以上、どうすればいいの……？」

「うくん。やっぱりパンツとか？」

「それを見せれば、今度こそ満足する……？」

「ん……。……多分」

『多分』というのが少し引つ掛かりはしたけど、ここまでしたのに彼の心を僅かも動かさないんじや意味がないとそう思い

「う……うう……っ」

私はとうとう、スカートをめくり上げてショーツを彼の目に晒していった……。

（ああ……もう、恥ずかしくて顔から火が出そう……っ！）
震えはもう、身体中に走っている。

（でも……これで満足してくれたわよね……？ 女の子の良さとかそういうの、少しでもちゃんと伝わってるわよね……？）
そう信じるしかない。

だってここまでしたのに何も感じてくれないなんて、そんなこと思いたくはないから。

それは女としても
彼の従姉としても。

「はあ……はあ……っ」

緊張しすぎて胸が高鳴るあまり、息が苦しくなってきた。
でも、その分きつと彼の心に変化があったと、そう信じて希

くんのほうをチラリと見ると——
「うん。やっぱりパンツもブラジャーと同じで、ただの布っ

きれて感じがするなあ」
彼は事も無げにそう言って——

「だから悪いけど、中身のほうを見せてもらうね」
言うが早い……信じられない！

私のショーツを、股間から剥ぎ取ってしまった……！
「や……っ！ いやあッ!!」

「……うん。いいね。ここはやっぱり、男とはだいぶ造りが違うみたいだ」

希くんは私のアソコを見て、感心したみたいに頷いている。
そんな淡々とした反応をされたことだけは救いだけど、でも

私は誰にも見られたくはない場所を人に見られたというショックで身体が固まり、全く動けずにいた。
それをいいことに、希くんは——

「へえ？ お姉ちゃんのおんな風になってるんだ？ ……
でも閉じててあまりよく見えないかな」

グイと私の割れ目を広げてきた!!

「ひ……ッ!? だっ、だめえッ！ やめて……!! 触らないでッ！ 見ないでえッッ!!」

そう叫ぶと共に、ようやく身体が動いてくれたので、慌てて股間を隠そうとするんだけど——

「やっ！ やだあッ!!」
希くんがガッシリと、腕を掴まれてしまった！

「い……いやッ！ 何するのっ!? 離してッ!!」
「ダメ。だつて離れたら隠しちゃうでしよ」

「あつ、当たり前じゃない！ そんなの……ッ!!」
「じゃあ仕方ないよ。ガマンして」

「そ……そんな、どうして……つて、あッ！ 触らないでえっ！ や……ッ!!」

……
希くんの指が、私のクリトリスをツンツンと突っついてる……

そのせいで、腰がビクンと跳ね上がった。
「やっ、やめて、やめてッ！ やあッ!!」

そう叫んでいるのに、希くんはちつともやめてくれない。
やめてくれるどころか——

「……あ。なんか皮が殆どめくれかかっているよね。気になるし、全部剥いちゃおうか。これ」

グリッとクリトリスの皮をめくり上げてきた！

「ひッ！ ひン……！！ やああっ、やああ……ッ！」

凄まじい衝撃が腰から下に走る……！！

そのせいで一瞬、何も考えられない状態になっていると——

「……やっ?!」

目の前が明るくなり、そしてシャッター音が鳴った。

「や……ッ！ なっ、何してるの……っ?!」

希くんが携帯電話を私に向けている。

(多分、写メを撮られたんだと思うけど……いったいどうしてっ……?)

希くんがしていることが信じられなくて、驚いて目をパチパチ瞬かせていると——

「ん？ ああ、これ？ だってお姉ちゃん、また見せてってやつでも見せてくれそうにないからさ。いつでも見られるように写真に撮ってるんだ」

希くんはあつげらんかんとした口調で、まるでこれがなんでもないことのように返してきた。

「い、いやよ……！！ いやっ！ 写真になんて撮らないでっ!!」

身体を見られるだけでもイヤなのに、写真だなんてそんな……いつでも、何度でも見られるような半永久的に残る物にしてしまうなんて、あまりに酷いと思う！

だから希くんの腕を振り払って逃げようと、そう思うのに……意外と彼の力は強くて、それは適わない……！！

「は……離してっ！ いやあッ!!」

「どうして？ 僕に女の良さを教えてくれるんじゃないの？」

「そ、そんな言い方——」

言葉の途中で、またシャッターを切られる……！！

「い、いやあッ！ 撮らないでっ、そう言ってるでしょッ!」

撮られること自体もイヤだけど、でも何よりなんだか身体がすごく熱くなっちゃうみたいで……だからとにかくやめて欲しい！

なのに——

「んぐ。そうだね。写真を撮るよりも、またちよつと触らせてもらおうかな」

そう言うが早いか希くんは、私が『ダメ!』と言う間もなく

「ひあッ?! あっ、あん……!!」

また私のクリトリスを触ってきた。

頭の前から爪の先までビリリとした電流が走り抜け、腰が震える。

(む、昔……自分でシた時よりもすごいみたい……っ。もしかして、あまりに久し振りすぎて……すっごく敏感になってる……? ああっ、もう……!! そんなのよく分からないけど、とにかくこんな……だめえっ!!)

「の……希くんっ、やめて！ 離して……っ！ お願いよッ!!」

「どうして？ 気持ちイイんじゃないの？ これ、大きくなってきてるけど」

「ッ!? や、やだ見ないでッ！ いやああッ!!」

希くんの言葉でクリトリスを見られていたんだってことを思い出し、そこを隠すために彼の腕を振り払おうとして、私は必死に身をよじった。

でも、それでも彼の腕はビクともしない。

(この細い身体のどこに、そんな力があるの……っ?)

よく知っている人はずなのに、まるで知らない人を見ているような気分になって、ゾツとする。

でも希くんは、そんな私の気持ちなんてお構いなしで――

「見ないでって、どうして？ これ、こんなによく反応してくれて可愛いのに」

意外にもそう言って、剥きだしになったクリトリスの先端をグリグリと触ってきた。

「んあッ！ あっ、あンン……！！ はっ、はああ……っ、そ……

……そこっ、お……大きくて、ン……、気持ち悪くないの……っ?)

「なんだ。もしかしてそんなこと気にしてたの？ 気持ち悪くなんてないよ。ほら、見て？ こうして強めに触ってあげると――

「あッ！ あン……!!」

「……フフ。こんな風にビクンと動いて、感じているんだってことを教えてくれるんだよ。可愛いくて、いい子だと思わないい？」

「そ……そんな……」

(そんな考え方があって……思いもなかった……。グロ

テスクで気味悪い物だとばかり、思っていたわ……)

希くんに『可愛い』と言ってもらえて嬉しかったのか、身体の強張りがゆっくりととけていく。

でも――

「なっ、なんにせよダメよ……こんなことっ！ 早く離してッ！」

そう。私たちは従姉弟だけど、教師と生徒でもあるんだし……

……何より私には正行さんがいる。

恋人である彼のことを拒んでおいて、従弟とこんなことをしていちやダメだと思っ。

だからもう一度強く身体を動かして、彼の腕をはねのけようかとしていると――

「……さて。じゃあそろそろ本格的に触ってあげるとしようかな。焦れてイライラしてたでしょ？ ごめんね」

私の気持ちや言葉なんて完全に無視して希くんは、そう言うが早いか――

「ひあッ!? ひいッ！」

クリトリスをギュツとつまみ、それをキュツキュツと軽くこすり上げてきた……!!

「ひああっ、ひ……ッ！ やめてっ、やめてえ……!! いやッ！ あああああああッ!!」

痛いような、くすぐったいような、凄まじい快感が襲い来て、身体の力が抜けていく。

(だ、だめ……!! もっとしつかりしないと、このままじゃいかされちゃう……!!)

そう気は焦るんだけど――



「次はこう……少し手を緩めてやると、ほら……どう？ 感覚が余計に過敏になってくるでしょ。これ」

希くんが……巧みにクリトリスを責めてくるから——

「ひあッ！ あっ、あああ……っ、ダメ！ イく……！！ あああっ、あああああああああああああああああ——ッ！！」

私は結局、耐える間もなく達してしまった……。

「わあ、すごい。お姉ちゃんの、ビクンビクン派手に痙攣してるよ。フフ」

クスクスと無邪気に笑って、いつている最中のクリトリスをシユツシユツと扱いてくる希くん。

そのせいで……クリトリスだけじゃないっ。

腰から下も、ブルブルと大きく震えて——

「うああっ、あッ！ もうやめてえええッ！ や……ッ！ んああっ、あああああああああああああああ——ッ！！」

私は続け様に達してしまった……。

「……うん、そうだね。前戯はまあ、これぐらいでいいかな」

（前……戯……？ それっていったい、なんのこと……？）

希くんがいったい何を言っているのか分からないけど、でも手を離してくれたのでホッとする。

だっ、激しくイキすぎたせいで身体がだるい……。

（ああ……。もう、このまま休ませて……）

戸締りして、鍵を職員室に返しに行かなきゃとか、それから家に帰ってご飯を作ったりしなきゃとか、そういうして当たり前のことしなきゃいけないと分かっているんだけど、でも……

……なんだか何もする気になれなかった。

そして、そのまま疲労感に身を任せていると——

「フフ。さて、じゃあそろそろいかせてもらおうとしようかな」

ボンヤリとそんな言葉が聞こえてきて、そして——

「……ヒッ!? ひいッ! やあああああああああああ——ッ!!」

アソコとお腹とに、凄まじい痛みが走った!

「……た、いたあッ! いやッ! やあああああ——ッ!!」

「痛いつて……え? もしかしてお姉ちゃん、処女?」

「のっ、希くんには関係ない……ッ! それより……い、痛い……ッ! 早く離れてえッ!!」

ズクズク、ジンジンと、アソコとお腹が痛みで疼いている! あまりに痛くて身体が震えて、手にも足にも力が入らない……!

だから希くんが離れてくれなきゃ、どうにもならないのに——

「ふうん? 心はともかく、身体のほうは僕を裏切りはしなかつただね。嬉しいよ」

彼はそんな、訳の分からないことを口にして——

「じゃあそのご褒美に、痛みを少し消してあげる」

腰を僅かにずらし、さっきよりもう少し浅い箇所を突いてきた。

その瞬間——

「んあ……っ! え……っ?」

本当に……本当に少しだけだけど、痛みが消えてくれたみた

い。

(ど……どうして……っ?)

それは分からないけど、例え全く痛みがなくなったとしても、
こうして希くんに好きなようにされている訳にはいかない。

だから痛みが引いて動けるようになったことだし、また彼から逃げようと思うんだけど——

「うあッ!? ああ……ッ!!」

動くときまたお腹とアソコに、ズキンと響く痛みが走った……!

「ああ、もう。お姉ちゃん、痛いなら馴染むまで無茶しちゃうだよ」

呆れたようにそう言って、希くんが僅かに動くと——

「あ……っ、ああ……っ!」

痛みはまた少しマシになって、甘く疼くみたいなき感じ……アソコ全体に広がっていく……っ。

「あ……っ、あ……っ、どうしてこんな……ンン……っ!」

「不思議そうだね、フフ。いま突いてるココはGスポットと言つてね。経験の浅い人でも比較的感じる事が出来る場所なんだよ」

そんな物慣れた彼の言葉に、大きな引っ掛かりを感じる。

「の、希くん……っ。女の子に興味がないって言ったのに……

……どうしてそんな……詳しいの……? もしかして私のこと……

……騙したの……っ?」

「興味がないということと、知らないということは、また別ものだと思うよ。そういう意味では……お姉ちゃん、僕はね、ホントに女の人には興味が持てないんだ。お姉ちゃん以外の人

にはね……。くくっ!」

そう言いながら薄く笑う希くんの態度に、怖気が走った。

「ど、どうして……っ? 私、希くんに何かした……っ?」

私にそんな覚えはないけど、でも——

「うん。でも、それは自分で思い出してよね」

希くんはそう答えて、私の身体を持ち上げて揺すり立ててきた!

「うあっ!? あっ、ああん! ああッ!」

こうされると更に痛みが引いてきて、快感のほうが強くなり、そのせいでどうしても喘ぐ声が漏れてしまう……!

「んあッ、あッ、あ……っ! こんなダメえっ! あん! いやあッ!」

(ああ……私、初めてなのに……こんなに喘いじやって、どうかしてるわ……!)

私のクリトリスが大きいと詰った彼とは結局、私が泣いてその場を去ったせいで最後まではいかなかった。

そしてそのことが心の大きな傷となつて、正行さんと出会うまで誰とも付き合つてこなかったから、私はこの年までずっと処女でいたんだけど、でも——

(こんな風に奪われてしまうなら昨日、正行さんに抱かれていたら良かった……っ!)

今になって、そう強く後悔してしまふ……。

(ああ……正行さん、ごめんなさい……っ。しかも私、希くんに犯されて感じて——)

「……ああん! ああッ! も……っ、やめてえッ! あああッ!」

思考を強い快感で打ち消されてしまった挙句、大きな声が漏れてしまった。

しかも、互いの結合部からは——グチュツ、グチュツ！
そんないやらしい音が聞こえてくる……！！

「い、いやあつ！ も……っ、恥ずかしいからやめてえっ！！」
「……うん。ホント恥ずかしいよね。初めてなのに、こんないやらしい音が鳴るぐらい濡らしちゃってさ」

「ッ！ そ……そんなこと言うなんて酷いっ！！」
こんなことしているのは希くんのほうなのに、そんな意地悪を言うなんて、ホントに酷いと思う。

でも……どうしてだろう？
酷いことを言われた瞬間、アソコがキュンとなって疼いてしまった……。

「酷いことを言ったつもりはないよ。だって僕は反応いいほうが嬉しいからね。それに、お姉ちゃんもホントに酷いなんて思っただけでしょ？」

「ど、どういう意味……？」

「言葉でイジメられて嬉しかった。……違う？」

「ッ！ ち、違うわっ！ そんな……何を言ってるの!? そんな訳……ないじゃないっ」

見透かされているみたいで焦るけど、でもそんな人の身体のことなんて分かる訳がないと思っただけで誤魔化してみる。

でもそんなの——

「そう？ ならそういうことにしといてあげてもいいけど……でも、オマンコがキュツと締まったから分かるんだよね。そういうの」

稚い容姿とは裏腹に、女慣れした様子の彼に対しては無駄だったみたい……。

（い……いやっ。バレてるなんて……どうしよう……。どうしたらいいの？）

レイプされているのに、こんなに感じてしまうなんて……ホントにどうかしてるのさと思えない。

（ああつ、きつとこんな……長いことオナニーしてなかったせいだわ……っ。絶対そうよ……！！）

そう繰り返して、取ってつけたような理由で自分を納得させる。だって何も理由がなければ、私は恋人以外の人に犯されて、初めてなのに感じてしまう変態だっただけになってしまっただけから

「フフ。お姉ちゃんの中、どんどん濡れてくるよね。ほら、さつきよりずっと出し挿れしやすくなった」

言っただけで希くんはリズムカルに腰を動かし、私の切なくなっちゃうポイント、ザリザリとこすり上げてきた！

そのせいで、自分でも分かるぐらいキュンと激しくアソコが収縮してしまう。

「やッ！ ああッ！！」

（だ、だめえ……っ！ こんな反応……また希くんからかわれちゃう！）

だからお願い、締まらないでと、そう強く思うのに——
「うああん！ あ……っ、あああああああッ！！」

思えば思うほど、どういう訳だか身体が焦れて疼いて、快感が深くなっただけ……！！

「んあッ！ あつ、あ……っ、も……こんないやあつ！ もうやめてっ！ 恥ずかしいから……ン、そんな風に……しない」

「でえッ！」

「そんな風について、どういうの？ もっと具体的にちゃんとやってよ」

「ン……んはっ、ああ……っ、ン……！！ い、いっばい……はア、こすらないでえ……っ」

「そう言っているのに、希くんはニヤリと笑って——」

「それって、そうされるとすごく気持ちがいってことだよ
ね？ じゃ、そろそろ痛みも引いてきたみたいだし、ご期待に
応えてもっと激しくこすってあげるよ」

「その言葉どおり、ホントに腰を激しく動かし始めた！」

「あひッ!? ひ……っ！ あああッ！ あ……ッ！」

（し、信じられない……！！ こんなに激しく責められているのに……もう殆ど痛くない……！！ ううん、それどころか痛みが熱
さに変わるみたいで私……それが気持ちイイとか感じちゃって
る……！！）

「そんな自分の反応が怖いと思うけど、でも——」

「フフ。お姉ちゃんの中、連続してキュッキュッと締まってくるね」

「こうして激しくアソコを貫かれてると、だんだん何も考えられなくなっていくみたい……！！」

「んあっ、あッ！ ああん、いやあ……ッ！」

「ウソつき。声もどんだん甘さが増してきてるよ。こんなに感
度がいいなら、次する時にはイけちゃうかもしれないね」

「っ!? そ、そんなのダメえッ！」

「そう？ それじゃあイかないように頑張ってるね」

「そ、そっっちゃなくて……ン、っ……次とかそんなの、絶対

ないのオ!!」

「それはお姉ちゃん次第かな。フフ……」

「そんな意味深なことを言って、希くんは——」

「まあ、取り合えず今日のところはもう出させてもらうよ。そ
ろそろ誰か、見回りにやってきそうだしね」

「グツと一際強く腰を突き上げ——」

「え……っ？」

「私の中に、ドクンと熱い液体を放出してきた!!」

「…………ッ!?」

「……凄まじい熱さが、私のアソコの奥に広がるっ！」

「い、いや……ッ！ いやあああああああああああああ——
ーッ！ 出さないでっ！ もう止めてえええッ!!」

「そんな、無理だよ。射精というのはね、オシッコと違って途
中で止まるものじゃないんだ」

「苦笑しながら希くんは、出している最中なのに、またクイク
イと腰を動かしてきた！」

「そのせいでおちんちんの先端が、グリグリと奥に当たる！」

「ひ……ッ！ い、いやあっ！ お、おちんちん……こすりつ
けないでえッ！ 赤ちゃん出来ちゃうッ!!」

「あ。いいね、それ。妊娠するまで犯しちゃおうか。フフ」

「ッ!? い……いやッ！ いやあッ！ やあああああああ

あああああ——ッ!!」

「私の知らない、初めて見るこんな希くんなら、ホントに私が
妊娠するまで犯し抜きそうで……怖くて身体がブルブル震えた
……っ。」



「あゝあ、震えちゃって。怖いのか？ 可哀相に。まあ、いまま
ったことは冗談だから忘れて。……今のところはってことだけ
どね。くくっ！」

そんな怖いことを言って希くんは、低く笑いながら――

「あ……っ」

ようやく私から身を離してくれた。

でもその直後――

「……うん。オマンコからドロリと精子が出てきてて、なかな
か卑猥でイイ感じだよ」

パシヤツと、またフラツシユが焚かれる。

「クリトリスも、もう完全に割れ目から飛び出しちゃって……
フフ。いやらしいねえ。ほら、お姉ちゃん。せっかく写真に撮
ってるんだし、もつと笑ってよ。ね？」

……こんな姿、写真に撮られたくないと。

だからアソコを隠さなきゃって、『撮らないで』って、そう言
わなくちゃって思うけど、でも――

「……………」

あまりにシヨックで……口も身体も動かなかった……。

scene03 【清花】

（希くん……どうして私にあんなことしたのかしら。何か、私
が悪いみたいなこと言ってたけど……でも、心当たりが全くな
いのよね……。だって十年前に引越してからはお正月とかお
盆とか、そういう時にしか会わなかったんだもの）

会う機会が減る。

それは、それだけ採め事なんかも減るということだと思う。

もちろん、ご両親が亡くなって、彼がうちの近所に越してき
てから何かあったと考えることも出来るけど……でも――
（いつも優しく笑ってくれたのに……）

そう。会うと彼はいつもニコニコ笑って私の話を聞いてくれ
て……。

喧嘩になんてなつた覚えはない。

（なのに、あんなことになってしまうなんて……気が重いわ。

もう彼は、私の知っている希くんじゃないみたい……）

希くんに会いたくなくて、今日はいっそ仕事を休んでしまお
うかと思っただけど……でも彼が卒業するのは約三年後。

それまでずっと逃げ続ける訳にもいかないのだからと、そう
自分を励まして登校してきた。

でも、やっぱり教室には入りづらくて、ドアの前でウロウロ
している――

「あれ？ 矢野先生。どうしたんです？ 中に入らないんです
か？」

後から正行さんに、そう声をかけられた。

「えっ!？」

弾かれたように振り返り、そして――

「お、おはようございます。伊部先生。もちろん入りますよ」
慌てて笑顔を取り繕ったけど……上手く笑えた自信はない。

（だって……あんなことがあったあとだもの。希くんともそう
だけど、正行さんとも顔……合わせづらいわよ）

なので、なるべく彼と目を合わせないようにしていると――
「あの……明日休みだし、良かったらどこ行かない？ 明後
日でもいいんだけど、どうかな？ 予定は空いてる？」

正行さんは声を潜めて、そう私の予定を聞いてきた。

（明日か明後日……）

特に予定は何もない。

いつもなら、正行さんと映画を観に行ったりご飯を食べに行
ったりして過ごすんだけど、でも今回は――

「……ごめんなさい。土日はちよっと、用事があるから……」

そう理由も何も言わずに断って、私は彼の前を後にした。

「……ふう」

放課後。

家に帰って一人になると、なんだか酷く考え込んでしまいそ
うなので、屋上でボンヤリしていると――

「あ……っ、ん……！！」

クリトリスがショーツにこすれ、アソコにジュワリと熱さが
走った……っ。

（い……いやっ！ なんなの？ 昨日から……。もうしつこい

……っ）

昨日、希くんに散々イジられたせいか、クリトリスが勃起や
すくなってしまったみたいで、何度もこうして下着にこすれて
感じてしまい、困ってしまう。

（あんな酷いことされたのに、終わったあとでもこんなになる
なんて……っ）

そんな自分があまりに情けなくて……泣けてくる。

それに、こうして身体に快感の余韻が残っていると……まる
でずっと希くんに愛撫されているかのような錯覚に陥ってしま
い、たまらなく恥ずかしい気持ちになっってくる。

だから感じたりしたらダメだって、もっと心を強く持とうと
思うのに――

「あふ……っ。あ……っ！！」

また口からいやらしい声が漏れてしまった……。

こうなってくるとクリトリスがジンジン熱く響いて疼いちゃ
って、思い切りこすり上げてしまいたくなる。

（ダ、ダメよ……そんなの。ダメえ……っ）

誘惑に負けないようにと、握り締めた手の平に、ギュツと力
を込めていると――

「…………っ！！」

後ろでドアが開く音が聞こえたので、驚いて思わず反射的に
そちらを振り返る。

すると、そこには――

「ここにいたんだ？ 探したよ」

冷たい笑みを浮かべた、希くんが立っていた。

そのまま彼は、こちらに向かって歩いてきたんだけど――

「な………何の用………？」

彼のが怖くて私は、つい距離を取ってしまった。

でも、彼は意に介した風もなく――

「ちよつと見てもらいたいのがあつてね。それで探してたん
だ」

屈託のない笑みを浮かべて、私の傍まで寄ってきた。

「あつ!?……ち、近すぎるわ……。離れて……」

「離れたらよく見えないからダメだよ」

言つて希くんは携帯電話を開き、その液晶画面を私に突きつ
けてきた。

そこには――

「あ……っ！ や……ッ!!」

私のクリトリスが……アツプで写されていた！

「やつ、やだ……そんなのっ、見せないでえッ!!」

激しくかぶりを振り、液晶画面から顔を背けると――

「そんなに見たくない？ 初めてで、しかもレイプされてるの
にクリトリスをピンピンに勃起させてオマンコぐしよぐしよに
濡らしてるとこ。つて言うか、この写真を撮った時はまだ大し
て触ったりしてなかったんだよね。なのにこんなに濡らして
るってことはお姉ちゃん、露出の気でもあるのかな？」

希くんはそんな卑猥な言葉で私を責めてきた！

「ろ、露出の気なんてある訳ないでしょ！ いやらしいこと言
わないでッ!!」

「いやらしいのはお姉ちゃんですよ。ほら、中出しされてる画
像もよく見てみてよ。さつきよりクリトリス大きくなってるん
だよ。これって犯されてる内に、どんどん善くなってきた証拠
だよね」

「よ、善くなつてなんかない！ 変なこと言わないでッ!!」

「そうかなあ。僕はお姉ちゃん、露出マゾつてヤツなんだと思
うけど」

「ろ……!! そ、そんなことある訳ないじゃない！ いい加減
にしてよッ!!」

「そう？ そこまで言うならお姉ちゃん、試してみようよ」

「試す……? 試すって何を……?」

「露出マゾの気があるかどうか」

「い……いやよ！ 冗談じゃないわ！ また変なことする気
でしょう!」

「それはお姉ちゃん次第かな。お姉ちゃんが僕の指示に従つて、
それで身体がなんの反応も示さなければ、僕はお姉ちゃんの言
葉を信じて、この写真を消去する。そして、二度とこうして付
きまどつたりしないと約束するよ。でもその代わり、お姉ちゃ
んがこの賭けに負けたら今後は僕の言うことに従ってもらう。
……さあ、どうする？」

「どうするつて……どうしてそんな、希くんが条件を出したり
するの？ あんなことして……悪いのは希くんのほうじゃない
……っ」

そう。あんなことしたお詫びにせめてつて、無条件で写真を
消去してくれたつていいと思う。

こんな写真、撮るほうがどうかしているんだし。

「確かにそうだね。でも、お姉ちゃんには弱味があるでしょ?」

「弱味つて……いつたいどんな?」

「この写真だよ。撮ったのは確かに僕で、悪いのも僕のほうだ
けど……でも、この写真を消去してもらいたいと思つているの

は僕じゃない。お姉ちゃんのほうだ。違う？」

「ッ!?!」

あの優しかった希くんが自分で脅迫材料を作って人を脅すだなんて……それが現実になった今も、どこか信じられないけど……。

でもこうして今や彼の存在に怯える私に取って、そんな物があることは、とても怖いことだったから——

「……………」

だから私は結局、彼が出した条件を呑むことに決めてしまった……。

scene04 【清花】

「ほら、お姉ちゃん。歩くの遅いよ。早く行こ？」

「ま……待ってよ。そんなつ、急かさないで……っ!」

私の前をはしゃいで歩く希くんに、腕をグイと掴まれる。

「あッ! や……っ、やあ……ッ!」

「どうしたの? 変な声だしちゃって。もしかして、感じちゃった?」

「な……ッ! そ、そんな訳ないでしょ! 変なこと言わないでっ!」

そう強く否定したけど、でも正直……こんなにツライことだとは思わなかった……。

「……………」

希くんには、下着を着けずにストッキングを穿くようにと言われている……。

それは異様な話ではあるものの……こうして比較的長さのあるスカートを穿く私に取っては、そう大したことじゃないと思っただ。

でも実際には、ストッキングのセンターシームがアソコに食い込むのもツライし……。

スカートに長さがあっても、それでも急に突風が吹いてめくられてしまうんじゃないかと不安に陥ったりで、憂鬱な気分になってしまう……。

それなのに希くんは——

「顔が赤いけど、ホントに大丈夫? 濡れたりしてない?」
無神経にも辺りを気にせず、大胆にもそんなことを聞いてき

た。

「ちよつ、ちよつと……！　こんなところで、そんなこと言わないでよっ！」

「じゃあ二人きりになれるところに行こうか」

「……っ！　い、行かない……っ」

「そう。ならもうここで確認しちゃう？　僕は別にそれでもいいけど」

「……………っ！」

希くんは屈託なく笑ってるけど、でもとんでもないことを言っている……………！

だって、希くんが出した条件とは——下着を着けずに一日過ごし、それでアソコが濡れていなければ写真を消去してくれるということだったから。

つまり、それをこの場で確認するということは……………ここでスカートをめくり上げられてしまうということになる訳で……………想像するだけで、あまりに怖くて足が震える……………っ。

「……………」

「さあ、どうする？　お姉ちゃんが決めてくれていいよ」

「……………ここじゃイヤ。それはやめて……………」

「じゃあ、二人きりになれるところに行こう。決まりだね」

「そつ、それもダメ！」

（だって、二人きりになったら……………また何をされるか分からな
いもの……………）

「もろ。お姉ちゃんはワガママだなあ。……………でも、まあいいや。
じゃあカラオケボックスに行こうよ。そこなら一応個室になっ
てるし、でもホテルみたいに密室って感じがしないから安心で

しょ？」

「……………！」

希くんのこんな申し出は、正直意外だった。

だって、彼は必ず私が困るようなことを言ってくると思っ
たから。

（心配しすぎだったかな……………）

私は少し彼に対して申し訳なく思いつつ、『じゃあそれで』と、
カラオケボックスに向かうことにした。

「……………」

「さてと。じゃあ、さつそく確認させてもらおうかな」

「……………っ！」

部屋に入った途端そう言われて、緊張で身体がガチガチに固
まってしまう。

「ま……………待って！　その前に……………トイレに行かせて……………」
あり得ないと思うけど、でも方が一にも濡れていたら困るか
ら……………。

だから悪いけどその場合、ティッシュでアソコを拭いてこよ
うとそう思い、尋ねると——

「うん、いいよ。どうぞ」

ことのほかアツサリと、希くんは許可してくれた。

「あ……………ありがとう……………」

驚いたけど、でもとにかくもうこれで二度と希くんにあんな
ことされずに済むと思うとホッとして、少し足取りが軽くなる。

「……………」

私は全身の強張りを解いて、トイレへと向かっていった。

「……………っ！」

トイレに入って、絶句する。

何故なら――

（どうして私の……………こんなに濡れてるの……………？）

私のアソコは尋常でないぐらい、たつぷりと濡れていたから……………

（ストッキングのセンターシームがアソコに食い込んでたから？ それとも希くんが言うように、私にはホントに露出の気があるのかしら……………）

そのどちらも認めたくない。

だって、ストッキングのセンターシームがアソコに食い込んで感じていたんだとしたら、それはあまりに過敏すぎて変だし……………

露出の気があるとしたら、もうそれはそれだけでツライと言
うか……………恥ずかしくてたまらない。

だからそのどちらでもないことを祈るんだけど、でもそれよ
り今は、希くんに確認される前にこうしてトイレにこれたこと
を幸運に思いたい。

だって、ここでアソコを拭いていけば……………それで賭けは私の
勝ちということになるのだから。

（そんなの、あまりフェアじゃないけど、でも……………元はと言え
ば希くんが悪いんだし、いいわよね。別に……………）

少し胸は痛むけど、でもこのまま希くんに犯され続ける訳に

もいかなないので、私は心の中で彼に謝り、そして部屋へと戻っ
ていった。

「お帰り。遅かったね」

「そ、そう……………？」

適当に答えて、彼の前の席へと腰を下ろそうとすると――

「ダメだよ。お姉ちゃんの席はここ」

強引に腕を引つ張られ、膝の上に座らされた！

「あ……………っ！ や……………ッ」

「イヤ？ じゃあ少し待とうか？」

その言葉に思わず頷きそうになってしまったけど、でも時間
が経てばまた濡れてくるかもしれないので、私はブンツと首を
左右に振った。

「ふうん？ いい覚悟じゃない……………じゃ、確認させてもらう
よ」

そう答えた希くんの手が、スカートの中に伸びてくる。

そして――

「んあっ！ あ……………ッ！」

ストッキング越しの股間に、指がピタリと触れた。

それからその指は、何かを探るみたいに忙しく動き回った。

「はあ……………ン……………っ！」

（だ……………ダメ！ あんまり触らないでっ。声が出ちゃう……………
っ！）

「ふうん？ やっぱりね」

納得したようにそう言って、希くんはスカートの中から手を

のけていった。

それはつまり、私が賭けに勝ったからだと思うんだけど……でも彼の物言いに少し引つ掛かるものがある。

(……何が？ 何がやっぱりなの……?)

不安に思うあまり、振り返って彼の様子を窺おうかとしていると――

「トイレでオマンコ、しつかり拭いてきたみたいだけど……でも残念ながら、賭けは僕の勝ちだね。お姉ちゃん」

後ろからそんな、嘲笑うみたいな声が聞こえてきてビツクリする。

「え……？ えっ？ ど……どういこと……っ？」

「拭いたのって表面だけでしょ？ 中までちゃんと拭かないと、またすぐ滲みだしてきちゃうんだよね。フフ」

そう言つて、希くんは――

「ひ……っ!？」

また私のアソコに触れてきた！

「だ……だめえっ！ いや……ッ！」

「なに言つてるの。もうお姉ちゃんに拒否権はないんだよ？ だってほら、一日下着を着けずに過ごしただけで、こんなに濡れてるんだからさ」

希くんはクスクスと笑いながら、アソコの入り口付近で縦横無尽に指を動かし、そして――

「あ……っ？ あっ、あん！ いやあっ！ や……ッ！」

グチュグチュという、いやらしい音色を響かせ始めた！

「や……っ、やめて！ そんな音、立てちゃいやあッ!!」

「そんなの、お姉ちゃんが悪いんじゃないか。こうして音が鳴

るのがイヤなら愛液、止めてみたら？」

「そっ、そんなこと自分でどうにか出来る訳ないでしょ……っ！」

「どうして？ 自分のことじゃないか。自分がココ、人に見られるかもか思つて勝手にドキドキして濡らしたんでしょ？ なら反対のことを思つてみれば」

「そ……そんなの無理よっ。無茶いわないで……っ！」

「そう。じゃあ仕方ないよね。こんな風にいやらしい音が鳴つても」

クスクスと小さく笑つて希くんは、更に激しく指を動かし、クチャクチャグチュグチュと、室内に響くほど大きな水音を立て始めた。

「ひあッ！ ひ……っ！ だめえっ！ やめてッ！ こんなのイヤよオ、いやッ!!」

恥ずかしくて身体がカッと熱くなり、激しく身をよじつて逃れようとする――

「ふう、まったく……。まだよく分かってないみたいだから改めて言うけどさ、お姉ちゃんは僕との賭けに負けたんだよ？ それ自覚してる？」

希くんがそう少し、怒つたような口調で聞いてきた。

「う……っ」

頭では分かつてるけど、でもそれを心では理解できない。

希くんが言うことに、心が追いついていないの。

(だってそんな……事前にちゃんと拭いたのよ？ それに、たったこれだけのことで私ホントに……これからずつと希くんの言うことを聞かないいけないの……?)

そんなの変だし、どこか現実的じゃなくて……。だからどうしても希くんの言葉を、受け入れることが出来なかった。

それを彼にハッキリ伝えて、それでもう帰ろうと思ひ——

「の……希くんが言う賭けなんて、無効よ。だってなんでも言うことを聞けだなんてそんなの……非人道的すぎるわ」

そう思い切って口にする——

「教師が生徒との約束を反故にしたりするのって、マズインじゃないの？ 少なくとも僕は、あまりいい気分じゃないよ」

彼は怒ったのか——

「あ……ッ!? い、いやアツ!!」

私の足を大きく開かせ、グツと強く押さえつけてきた!

「こつ、こんな格好いやアツ! 離してッ!!」

ここには私たち二人だけだけど、でもそれでも恥ずかしいに決まってる!

一度見られたからって、そう簡単に慣れはしないの……!

それに……この位置だと、誰かが廊下を通れば見られてしまうかもしれない!

だって、部屋の扉はガラスで出来ているんだから……。

だから離して欲しくて必死に足掻くんだけど、でも希くんの力はやっぱり意外と強くて——

「ああアツ! いやッ! あん……!!」

逃げきるどころか、ストッキングをグイと引っ張り上げられてしまった!

そしてそのまま希くんはグイグイとストッキングを上下に動かし、センターシームを割れ目の中へと食い込ませてくる!

「い……いやアツ、アツ! そんなにそこ……刺激しないでえッ!!」

「どうして? 気持ちイイんでしょ? もっとして、の間違ひなんじゃないの?」

「んああ……っ、ん……! き、気持ちよくなって……ないんだからア……っ!」

「そんなウソついたって無駄だよ。お姉ちゃんのクリトリスは大きくて分かりやすいんだからさ。……ほら、もう勃起して割れ目から飛び出してきた」

「え……ッ!? やっ、やだやだ! 見ないでッ! そんなのイヤアツ!!」

見られているかと思うと、恥ずかしくて身体がカアツと熱くなり、ゾワリと腰が浮いてしまう……!

「イヤって言っても、お姉ちゃんが勝手にしていることだしね、コレ。僕のせいじゃないよ」

「ちが……違おう……っ。希くんが……ん、そんな風にクイクイってしなきゃ……こんなことにはならないのオ……!!」

「そう? まあ、そうまで言うなら試してみようか。僕のせいとか、それとも単にお姉ちゃんがいやらしいせいなのかを」

言って希くんは、ストッキングを引っ張るのをやめてくれたけど、でも——

「あ……っ、あああ……っ!」

しばらくしてもクリトリスの勃起は……止みはしなかった。それどころか——

「いやあ……ッ!」

なんだか、どんどん大きくなってくるみたい……!

「こ、こんなのいやあ！ 離してッ！ やあッ!!」

恥ずかしくてたまらなくて、だからソコを隠したいって、そう強く思うんだけど、でも希くんは私を押さえつける手を緩めてくれない。

その上また――

「これで僕が何かしてるせいじゃなく、単にお姉ちゃんがいやらしいだけだってこと、証明された訳だよね」

ストッキングを思い切り引っ張り上げてきた！

「やッ！ あん……！ だめっ！ そんなことしないでえッ!!」

「して欲しくせに。お姉ちゃんはウソつきだなあ。……ほら、見て？ クリトリスだけじゃなくオマンコも、もうすごいことになってるよ。ストッキングに大きなシミが出来てる」

希くんのこの言葉は本当で、ストッキングのセンターシームはもう濡れて酷いことになってた……。っ。

「あああッ、ああッ！ こんなのヤダあッ！ いや……ッ!!」
(どうして私、こんなになってるの!? 私は本当に希くんが言うように、露出の気があるの……っ!?)

そんなのない、あり得ないって思うんだけど、でも――
「……あ。いま廊下を通った人、こっち見てたかも」

こんなことを言われて、誰かの視線を意識すると……身体がまたゾワリと震えて、腰がビクンと跳ねてしまう！

「ああん！ ひ……ッ！ やあ……ッ！ はっ、恥ずかしいッ！ お願いだから、もう離して！ また誰か通ったら……ん、どうするのッ!？」

そう少し強めの口調で言っつて、必死にこんなことやめさせよ

うとしているんだけど――

「どうするって……」

希くんは『くくくッ』と、痛に障る低い声で笑って――
「こうしてお姉ちゃんの大きくていやらしいクリトリス、いっぱい抜いて気持ちよくなっていくとこ見せてあげるに決まってるじゃないか」

その言葉どおり、私のクリトリスをキュツとつまんで抜き上げてきた！

「ひッ!? ひいいッ！ なっ、何これ!? いやあッ、やめてッ！ あああッ！ やああああああーッ!!」

強烈な刺激がクリトリスから脳天へと突き抜けていき、魚が陸に上げられたみたいにビクンビクン身体が跳ねる！

「ふああ……っ、いやッ！ おっ、お願い……それっ、キツすぎで……だめえッ！ ああああああッ!!」

「何？ もしかしてお姉ちゃん、自分のこんな風にして触ったことはなの？」

「そっ、そんなのある訳……ん、ないじゃない……ッ！」
こんな……いくら経験の浅い私だって知っている。

こんな風に扱いたりするのは、男の人が自分でする時のやり方だっつて。

だからムツとして、怒ったように答えると――
「ごめんごめん。怒った？ でもお姉ちゃんの、せつかくこんなに大きいんだし……だからこうして、皮を剥きながらズコズコって激しく抜いたほうが気持ちイイんじゃないかなあ。こないだもこうしてあげたら、すごく悦んでたしね」

そう言っつて希くんは、さつきより更に更に激しくクリトリスを扱

き上げてきた！

「ひいッ！ ひッ！ もうやめてえっ！ らめっ、らめえッ！ ひいひいひいひいひいッ!!」

私の太ももが、怖いぐらいにガクガクと震えてる！

そして、その震えが爪先まで伝わったかと思うと――

「ひあぁッ！ イク……ッ！ いやっ、いやあ……ッ！ あああああああああああああ……ッ!!」

パァンッと目の前で何かが弾けたみたいに凄まじい衝撃が襲いきて、そして頭の中が真っ白になっていった……!

「うわあ。すごい深くいつちやつてるねえ、コレ。僕の指の間でビクビク蠢いてるよ」

「ひひゃッ!? ひ……ッッ! コ、コリコリッてしないで……ッ! ああッ、だめ……ッ! ひいッ! ひいッ! ひいッ! ひいッ! ひいッ! ひいッ!」

いつてる最中なのに、責める手を緩めてはもらえず、続け様に絶頂を迎えさせられる……!

そのせいでもう震えは全身にまで達して、「もうやめて」って強く強く思うのに、希くんはやめてくれるどころか――

「この状態で突っ込むと、かなり気持ちいいんだよね。すっごい振動が伝わってきた」

下からズツプリと、私をおちんちんで貫いてきた!

「ひあぁッ! ひッ! ひいッ!!」

ズクンとアソコが脈打ち、怖いぐらい深い快感が襲ってくる! そのせいで痛みはあまり感じずに済んだけど、でも――
(そ、そっこのほうがイヤぁッ! こんなっ、犯されてるのに感じたりしたくない……ッ!!)

だからやめてって、もう酷いことしないでって思うんだけど、でも希くんは私の気持ちなんてお構いなしで、ガンガン激しく突いてくる!

「い……いやぁッ! あぁッ、あぁッ!!」

「ああ、思ったとおりにすごいね。お姉ちゃんのおマンコ、ビクンビクン脈打ってるよ」

満足げにそう言って、抽送を続けてくる希くん。

しかも、それだけでなく――

「こうしたらまた見られるかもかと思って、恥ずかしくてもっとギユウツと締まっちゃいそうだよな」

私の上着をめくり上げてきた!

「あッ!? い……いやぁッ! み、見られちゃう! やだぁッ!!」

希くんの言葉で、また人目を意識してしまい、恥ずかしくて……なんとかして胸やアソコを隠そうと思うんだけど――

「見られるのがイヤくせに。ほら、もつと奥まで入っていくとこ見てもらおうよ」

グイと子宮を突き上げられると、手足の力が抜けてしまつて、抵抗できなくなつてしまう!

「んはッ! ひ……っ、ひいッ! いやッ! ああ……ッ! ど……どうかお願いッ! 誰も……ンン、誰も廊下を通らないでえ……っ!」

「廊下って……お姉ちゃん、もしかして気にしてるのはそこだけ?」

「……え? ど、どういう意味……?」

なんだか希くんの言葉に嘲笑的なものが含まれていたような

気がするので、おそろおそろ尋ねてみると――

「僕らの正面にある監視カメラに、気づいてなかったんだ？」

「希くんはそんな……とても怖いことを言ってきた！」

「カ、カメラってそんな……ダ、ダメーでしょ!? イヤよ、ねえっ、お願いだからそうだと行ってえええッ!!」

「イヤだなんて、またそんなウソついちゃってえ。もつと素直になつたらどう？ そしたら楽になれるよ」

「ウ、ウソなんかついてないッ！ どうしてそんな意地悪いうのっ？」

「だってお姉ちゃんのオマンコ、カメラのことを言った瞬間、ギョッと縮まったからさ。だから分かるんだよ、ホントの気持ちと反対のこと言ってるってさ」

「ッ!? ウ、ウソ……!! そんなのウソおッ!!」

「ウソじゃないって。少し集中してみれば、自分でも分かると思うよ。ほら、もう一度カメラ越しに誰かに見られてるって想像してごらんよ。実際見られてると思うしさ」

「ッ!? い、いやあッ！ も……っ、ホントに離してえッ！ いやあああッ!!」

「そう大きな声で叫んだ瞬間、確かに私の中はキュンと縮まつて――」

「んあ……っ!? あっ、ああん、あ……ッ!!」

「ゾクゾクとした震えが、全身を駆け巡っていった……!!」

「フフ。ほら、また縮まった。今度は自分でも分かったでしょ？」

「……………ッ!」

「勝ち誇ったみたいにそう言われて、気恥ずかしくて『いやっ!』と大きく首を振る。」

「強情だなあ。意外とお姉ちゃんって昔からそういうところあるよね。でも……フフ。さすがにもうすぐ自分が露出狂だってこと、認めざるを得なくなると思うよ」

「え……? そ、それってどういう――」

「……えっ!?」

「部屋にガチャツという音が響くと共に、店員さんが中へと入ってきた!!」

「オーダーはお決まりでしょうか？」

「……そう店員さんが、あまりに淡々と聞いてくるので一瞬ポツとしてしまったけど――」

「い……いやあああああああああああああッ!!」

「すぐに正気に戻り、甲高い悲鳴が口から迸る！」

「い……いやです！ いやあッ！ 出て行って！ お願いよオオ!!」

「注文を聞いたら出て行きますよ」

「だつてさ、お姉ちゃん。さあ、何にする？ ここ、ワンドリ

ンク制なんだよね」

「そっ、そんなの聞かれたって……わ、分からないわよ!!」

「恥ずかしさのあまり頭がパニックになって、何も考えられなくなってしまう！」

「ふうん。じゃあ仕方ないね。いつまでもこのままでよ」

「い……いやあッ！ そんなのイヤあああッ!!」

「ただでさえクリトリスが大きくて恥ずかしい身体だから、誰にも見られたくないって、ホントにイヤだと……そう思う。」

「なのに――」

「く……っ！ う……っ、うああっ、あああああああッ!!」
見られていると、そう意識すればするほど身体がどんどん甘く疼いて熱くなつていく……!!

「ん？ お姉ちゃんのおマンコ、さつきとは比べ物にならないぐらいギュウツと締まってるねえ。ちよつと痛いぐらいだよ。そんなに見られて嬉しいんだ？」

「ちつ、違う！ ああ……っ、そんなことないッ!!」

希くんがそんなことを言うものだから、店員さんの視線が気になつて仕方がなくて視線を上げると――

「ひひ……っ」

店員さんはニヤついた笑みを浮かべて、私のアソコをジッと見ていた！

「ッ！ い……いやあつ！ お、お願いですから……こんなつ、見ないでくださいッ！ やああッ!!」

「いやだなあ。そう言うならそんなこと、こんなところでしないでくださいよ。いやらしい汁でソファアを汚されたりしては迷惑ですし」

「そ……それは……そのつ、ご……ごめんなさいっ！ あ、謝りますから……ン、お……お掃除も、ちゃんとして帰りますから……だから……はあ……ッ、ン……、も……っ、お願いですから、そんなにジツと見ないでくださいっ！ いやあッ！ やあああッ!!」

そう叫んだ瞬間、急にジュワツとアソコの中が熱くなり――
「あ……ッ！ い、いやっ、何ッ!? ア、アソコが変なの！ 変なのオ、いやあッ！ ああああああああああああああああッ!!」

ビュツと希くんのおちんちんの隙間をぬつて、勢いよく何かの液体が飛び出してきた!!

「っ！ ……へえ？」

「おお……っ!!」

「ひ……ッ！ ひいっつ！ いやっ！ 何これっ!? オシッコ!? いやあ……やッ！ ご、ごめんなさいっ、ああッ！ 止まらないのオオオ！ ああああああああああああああッ!!」

オシッコと思しき液体は、ビュツビュツビュツと、今もまだ出続けている。

お腹にグツと力を入れても、止まらないの……ッ！

「あああつ！ いやっ、こんなのいやあッ!!」

「イヤなのはこつちのほうですよ。こんな水浸しにしちやつて……一体どうしてくれるんです？」

「んあッ！ ン……ごっ、ごめんなさいっ、ああッ！ ごめんなさいい……ッ!!」

そう泣いて必死で謝罪したけど、店員さんに私を許す気はないみたいで――

「上の者を呼ばせてもらいます」

壁にかかったインターフォンを操作し、『すぐにこちらに来てください』と、ホントに誰かを呼び始めてしまった！

「いつ、いやあッ！ お……お気が済むまでいくらでも謝りますからっ、どうか許して！ 人を呼んで、見せたりしないでえええッ!!」

「フフ。無駄だよ、お姉ちゃん。だつてもうあの人、誰か呼んじやつたんだしさ」

「や……やだあつ！ の、希くんってば、どうしてそんな……お、落ち着いてられるのオ!?」

「それどころかまた私を突き上げてきているし、ちよつとどうかしてると思う！」

「だって、僕は男だから別に見られても恥ずかしくはないよ。

それに、お姉ちゃんほどいやらしい身体をしている訳でもないからね」

「ひっ、ひど——」

私の言葉が言い終わらない内に——

「どうも困った客がいるみたいだなあ」

「先輩、大丈夫ですか？ 一人じゃ大変かと思つて、何人か連れてきたつすよ」

「さつきからずっとモニターで見えてましたけど、困った客ですよね。ホント」

「ホテルにでも行きやあいいのにねえ。つて、ああ露出狂なのかな」

ドアが開いて、いつばい男の人が入ってきた！

「ひ……ッ！ い……いやアッ！ ああッ！ 見ないで見ないでッ！ やあああああああああ……ッ!!」

絶叫と共に頭が真っ白になり、またビュッビュッとオシッコが噴き出してしまふ！

「あ、また！ さつきからずつとこの調子なんですよ、この女」

「困ったねえ」

「でっかいクリ、バキバキに勃起させていきまくつて……マジでこの女、露出狂なんでしょうねえ」

「でしようね。ならもつとしっかりと見てやりましょうよ」

「です。ね。あ、そう言えば監視カメラの録画もバツチリですよ！」

「ひ……ッ!? い、いやあつ！ そんな……ッ、もつ、怖いのオ！ いやアッ！ あああああああああああああああああああ……ッ!!」

しっかりと見ると言われたり、監視カメラで録画していると聞かされたりして、怖くて怖くてたまらないんだけど、でも怖いと思えば思うほど、身体は熱くなつちやつて——

「うああッ！ あ……ひッ！ ひいいッ！ ああああああああああああああああああああ……ッ!!」

また私はオシッコを噴き上げて、頭の中を真っ白にしていった……！

（この感じ……。ああつ、私……いつてるんだわ！ こんな……大勢の人に見られるのに、監視カメラにも録られるのに……希くんに犯されて……イっちゃつてるのオオオ!!）

「いやアッ！ ああああああああああああああああああああ……ッ!!」

「うわ……。もう水浸しですわね」

「うくん。まあ、あとで自分で掃除して帰つてもらおうとしよう」

「店長、甘いつすよ。……あ、いいモン見せてもらったお礼つてことですか？ うはっ」

「いい物かあ……。うん、確かにね。滅多にいませんよ、あんなクリのデツカイ女。あく、今日はホント、珍しいモン見たなあ」

「監視カメラの映像、ネットで流したりしたら面白いことになりそうですよね」

「イヤよイヤよも好きの内ってヤツなんだろうよ、うん。女性にはよくあることだね」

「しかしホント、面白いぐらい簡単にイキますよね」

「それだけ見られるのが好きってことだろ。可哀相に、変態なんだよ」

「可愛いのに、勿体ないですねえ。でも、こんなやらしい身体してたらそつちばっかり覚えちゃって俺、顔なんて印象に残らないかも」

「あ、確かにそうかも」

「違うない！」

「ハハッ。ちよつと勿体ない気もするけどね」

「いやいや、そんな忘れた時のための監視カメラですよ」

「あ、そうか。録画してるんだつたよね。ハハッ」

「ひいっ！ も……っ、酷いこと言わないでえッ！ いやあッ！ いやあああああああああああああああ……ッ

!!」

私は大勢の人が発する笑い声の中、何度も何度もオシッコを噴き上げて達していった……。

「……………」

帰宅してから、もう何時間が経つんだろう？

気がつくくと、部屋が暗くなっていた。

ボーツとされている内に、日が落ちてしまったみたい。

「……………あ。電気つけないと……………」

そう呟いてみたけど、でも……………身体のほうは動いてくれない。足に根が生えてしまったみたい動かないの。

「……………」

……………今日はあれから結局、あの場を自分で掃除して、その間に希くんが監視カメラの映像をそのままでは流さないように」と交渉してくれた。

その結果、なんとか顔だけは隠してもらえたことになったけど、でも——

（ああ……………っ、イヤ！ けつきよく身体は大勢の人に……………見られてしまうのね……………!）

そう。あれだけ誰にも見られたくはないと思っていた私の大きなクリトリスは、いっぱいの人に見られてしまう！

それを思うと恥ずかしくて悔しくて、ジワリと涙が浮かんでくるけど……………でもそれと同時に——

「あ……………っ、ン……………!」

こうしてアソコが、ジュンと甘く疼いてしまうの……………っ。

そんな私のことを希くんは、『露出マゾなだけでなく、淫乱の気もある』と言って笑っていた。

（ああ……………私、もしかするとホントに少しだけ……………そういう気

があるのかもしれない……。だってレイプされてるのに……。大勢の人に見られてるのに……。それでも何度も何度もイっちゃうんだもの……。しかもエッチするのって、今日でまだ二回目だったのに……)

普通の女の人ならまだまだ痛くて、いくどころか感じることもだつて出来ないと思う。

(それなのに私は……。オシッコまで漏らしてあんな……。何度も何度も……)

「ああ……っ！」

さつきまであんなに憂鬱で、あの映像を人に見られたらどうしよう怖いって、そう思ってたのに、カラオケボックスでのことを思い出すと……。身体がゾクリと震えて熱くなってくる。

(こんなになるなんて……。私、やっぱり……っ)

もうたまらなくなっちゃって、胸をドキドキさせていると――

「ッ!!」

不意に電話のベルが鳴り、驚いてビクリとお尻が跳ね上がる……。っ！

電話の表示を見てみると……。正行さんからだった。

「あ……」

つい、出るのをためらってしまふ。

でも、呼び出し音はずっと鳴り止まなくて――

「……はい」

私は受話ボタンを押し、電話に出た。

「……あ、いま話しても大丈夫かな？」

ホントは罪悪感ヒシヒシなせい……。いま上手く話せる自信

はないんだけど、でも電話に出ておいて『無理』とは言いがらので、『はい』と受け答えする。

それに、正行さんの優しい声を聞いて心を落ち着きたいとも思った。

……。そんなの勝手だし、矛盾してると思うけど。

「話せるみたいで良かった。嬉しいよ」

そう言ってもらえて、こちらのほうが嬉しくなるけど……。でも同時に切なくもなる。

だから何も言えずに、押し黙っていると――

「……。あの、しつこいって思われるかもしれないけど、明日よかつたら会えないかな？ 実は、渡米していた両親が帰って来ていてね。明後日にはまた向こうに戻ってしまうから、良ければそれまでに会ってもらえないかなと思ってるんだけど……。その……。どうだろう？ 君を親に紹介したいんだ」

正行さんはそう、これが私の勘違いでなければ遠回しにポーズをしてきた……。っ！

「……ッ！」

いくら恋愛事に疎い私にだって分かる。

――抱いてもいない女に、プロポーズする。

それがどれだけ追い詰められてのことなのかということが。

「……………っ」

そんな風に正行さんを焦らしてしまったのは私。

私がいっぱい彼のことを……。傷つけてしまったから。

(こんな、大した身体でもないのに勿体つけて、それで激しく自尊心を傷つけてしまったからよね……。昔、付き合ってた人に酷いことを言われたからって、自分ばっかり被害者ぶって……)

…！)

もちろんそんな話、正行さんにはしていない。

でもむしろ、していないからこそ罪深いんだと思う。

話していれば、どうして自分が拒まれるのかという理由はせめて分かったはずだから。

そしたらスッキリは出来たと思うのに……私はそうさせてもあげずに、ただ自分が傷つきたくない、そればかりで……。

正行さんのことなんて、これっぽっちも考えていなかったと思う。

(そんな最低の女、正行さんには相応しくないわ……っ。正行さんには、正行さんのことを自分以上に大事に思ってくれるよ。うな、そんな心も身体も綺麗な女の人のほうが似合うはずよ……！)

そう自己嫌悪に陥り、自身を苛んでいると――

「あ……あの、ごめん……！！ 両親に会ってだなんて、ちょっと焦りすぎだよ。君が怒るのも無理はないよ。ホントにごめん！ 気を悪くしないで？」

優しい正行さんは、自分が私を傷つけたと思ったようで、すごく心配そうな声で謝ってきた。

(……傷つけてるのは私のほうなのに。今もまた傷つけてしまったのに……！)

そう思うと、もう私の口は止まらなかつた。

「正行さん。私……あの、ごめんなさい。もうアナタとはお付き合い……出来ません……。ホントにホントにごめんなさい……。それじゃあ……」

言って、彼の返事を待たずに電話を切った。

それから、また少しして彼から電話がかかってきたけど、今度は決して受話ボタンを押しはしなかつた。

だって彼の声を聞くと、心が揺れてしまうから。

大好きな人だから、やっぱり別れたくないと思ってしまうに決まってる。

そして、そしたら――

(また、彼を傷つけてしまうの。きつとこれからは、これまでよりもウンといっぱい……。だって私には……悔しいけど希くんが言うように、露出の気とかマゾツ気とか……そういう変な気質があるみたいなんだもの……。そんな女、とてもじゃないけど……あの誠実で優しい正行さんには合わないわ……)

そう。今以上にあの人にツライ思いをさせてしまうに違いはない……。

だから悲しいけど、寂しいけど、切ないけど、ここでもうお別れするのが、私が彼のためにしてあげられる唯一のことなんだと、そう信じて疑わなかつた……。

Crescent

この続きは製品版をご購入の上、お楽しみください。

誌名：Paraphile ～本当の自分～

発行：Crescent

著者：天城 悠理

連絡先：circle.crescent@gmail.com

URL：<http://www.welcome.zaq.jp/crescent/>

※本書の無断転載・複製・複写・再配布・Web アップロードを禁じます。



▲MAIL/URL▲



Crescent